

令和 8 年 度 学 校 経 営 計 画

1 学校教育目標

- ・知性を磨き、社会の進展に対応できる力を育てる。
- ・自他尊重の精神と情操豊かな心を育てる。
- ・健全な心身と未来を拓くたくましい力を育てる。

2 学校の特色

- ・5学科各学年5クラスの総合制高校として魅力ある教育活動が展開できるよう、各学科の特性や生徒の実態等を踏まえ、一人ひとりの自己実現をめざした教育活動を推進しています。
- ・氷見市で唯一の高校として地域との結びつきを大切にしています。生徒の気質は明るく素直で、学習や部活動、生徒会活動をはじめ学校生活全般にわたって、ひたむきに一所懸命に取り組む校風があります。
- ・普通科では、ほとんどの生徒が国公立大学を主とした四年制大学等、進学を目指しており、2年次よりⅠ類型、Ⅱ類型に分かれ、各々において理系、文系の類型別授業を編成しています。生徒個々の興味・関心や進路希望等に応じた学習活動の充実に取り組んでいます。
- ・専門学科は、農業科学科・海洋科学科、ビジネス科、生活福祉科の3学級で構成しており、体験的学習や学校発で設立した株式会社HIMIco-bridgeなどの地域事業者と連携して社会課題の解決を図るなど、実社会に役立つ多様な取り組みを通して、学びを深めています。
- ・令和2年度より地域との協働による探究学習に取り組んでいます。氷見市より、地域協働学習コーディネーターを派遣していただき、校外での学びの場や機会、人とのつながりの創造に取り組み、価値あるリソースに恵まれる中、生徒の学びが広がっています。1年次「未来講座 HIMI 学Ⅰ」では、地域を中心とするフィールドワーク等をとおして知識や体験を増やし、物事を探究する姿勢や学ぶ力を育成する課題解決型の探究学習を実践しています。2学年普通科では、「未来講座 HIMI 学Ⅱ」において、1年次の探究活動で立てた仮説に対して実働的に取り組み、実践、検証、実践の探究活動を行い、その成果をまとめて発信する取り組みを行っています。この取り組みに地元氷見市より様々な支援をいただくなど、地域と協働して取り組む象徴的な活動となっています。
- ・進路実現をサポートする「キャリア教育」を経済界と連携して推進し、各学科の枠を越えて将来への広い視野を育みながら、学科間で連携するなど、特色ある教育活動を推進しています。
- ・『文武両道』の校風を大切にし、学習と部活動の両立に努めています。部活動では幾多の全国制覇の経験がある男子ハンドボール部をはじめとして、野球部、自転車競技部、女子ハンドボール部やその他多くの運動部、文化部が輝かしい成果を上げています。一方、生徒の学習意欲や進路意識の多様化が進む中、学校全体として主体的で協働的な学習指導及び進路指導体制を整え、生徒の学習意欲の一層の向上を図ることが求められています。また、生活面においては、生徒の社会性や規範意識を醸成し、家庭や地域との連携に根ざした信頼される学校づくりを進めている。

3 学校の現状と課題

本校は5学科を有する総合制高校です。各学科の生徒は経験、技能、専門性、意欲等において、多様な価値観を有しており、協働した学びの中で互いを高め合う可能性に満ちています。学校全体としても、多くの学科を有することを強みにして、新たな価値を創造する可能性があり、それらの可能性を最大限に活かすため、スクールポリシーで「育成を目指す資質・能力」を以下のように定めています。

- (1) 協働する力（多様な考え方を受け入れ、人々と協働し、目標を達成する力）
- (2) 思考力・判断力（論理的思考力や批判的思考力を身につけ、情報を適切に判断できる力）
- (3) 創造的に挑戦する力（課題を発見し、原因や背景を分析した上で、既成概念にとらわれずに新たな価値を創造し、解決する策を導き出そうとするなど、果敢に挑戦する力）
- (4) 自律的な学びの力（学びの意義を理解し、生涯にわたって学び続ける力）

また、学校課題として以下の3点を挙げ、重点目標を設定し、学校経営に取り組みます。

- ① 個に応じた学習指導、進路指導のあり方
- ② 学科の専門性の深化、学科間の横断的な学び、生徒の連携・協力の機会の創造
- ③ 社会に貢献し、問題解決能力の高い人物の育成

4 学校教育計画

項 目		目標・方針及び計画	
1	学習活動	目標	① 個に応じた学習指導を目標とし、生徒の能力や意欲・理解度に応じた主体的な学びを創造する工夫を施す。 ② I C T機器を有効活用する姿勢を育むとともに、教職員が I C T機器の有効性を一層学び、より活用範囲を広げつつ主体的な学びの充実を図る。 ③ 地域と学校が協働した学びを通して、各教科での学びを実社会の課題解決に生かす力を育成する。 ④ 地域協働学習を通して、自らの考えや探究の成果を地域や社会に発信できる力を育成する。
		計画	① 教育アプリケーションやデジタル学習コンテンツの価値を最大限に活用し、生徒、教職員が一体となって学習意欲の向上に繋がるよう努める。 ② <u>教職員が I C T機器を使用することで、生徒の理解が高まるだけでなく、創造的な学びが展開されるよう努め、互見授業を通して研鑽し合うことで授業改善を進める。</u> ③ <u>課題発見や課題解決に向かう探究的な地域協働学習において、各教科で身に付けた資質・能力を活用し、教科学習と探究学習とのつながりを意識できる学びを推進する。</u> ④ 地域協働学習での発表会や地域への提案活動、対話活動等を通して、資料作成やプレゼンテーションなど、自らの考えを論理的に表現し、発信する力の育成に努める。
2	学校生活	目標	① 生徒の自己実現を図るため、生徒が主体となった取り組みにより、「誇りに思える氷見高校」を生徒と職員が一体となって創造する。 ② 人権尊重の精神を基盤とした、「安心して過ごせる氷見高校」を生徒と教職員が一体となって創造する。 ③ 心身を健全に保持するための健康課題について、生徒自身が己と向き合うことで主体的に見つけ、課題解決に向かう力を育む。 ④ 生命尊重の精神と、安全に行動する指導の徹底を図り、事故の防止や防災について万全の体制を整える。
		計画	① <u>「氷高さわやかデイ」を通した挨拶の励行や、基本的な生活習慣である時間・交通・服装の社会的マナー等、委員会活動を通して、啓発・実践することで、自己指導能力の向上を図る。</u> ② <u>「安心して過ごせる氷見高校」をキーワードとして、人権教育を基盤とした活動を展開する。いじめ撲滅や人間関係に関する悩み、問題行動や心身不調の原因を早期に把握し、外部機関や保護者とも連携して生徒との信頼関係に基づく対応を推進する。</u> ③ <u>睡眠時間や感染症予防などの見直しから、生徒自らが健康課題を発見、解決できる意識を高めることができるよう、生徒保健員会やP T A保健体育委員会と連携して取り組む。</u> ④ 避難訓練等や外部講師による講話等を通して、災害や交通事故、危険行動の未然防止に努めるとともに、生命の尊さについて考える道徳教育を推進する。

3	進路支援	目標	① 進路実現の手立てについて、生徒の理解と主体的な行動を促進し、生徒自身が主体的に自らの将来を考えることのできる企画に取り組む。 ② 進路関連行事や個人面接等の充実と進路意識の高揚に向けての取組を充実させる。 ③ 自己の生き方を考え、職業観を踏まえた進路設計を立てさせる。
		計画	① <u>生徒自身が進路について継続的に考え、将来や職業について周囲と意見を交わし様々な価値に触れる場や機会を設定し、高い志を持って主体的に進路実現に挑戦する生徒を支援する体制をつくる。</u> ② <u>学年間の連携を密にし、3年間を見通した継続的・計画的な進路指導体制の確立を図る。また個人面接や進路に関するHRを充実させ、生徒の進路意識が明確になるよう適切な進路指導を行う。</u> ③ 就職指導については、2学年の専門学科が一斉に行うインターンシップに取り組むとともに、3学年については、求人票に基づく企業研究や会社訪問等を通して職業観や勤労意欲を持たせる。
4	特別活動	目標	① 学校行事、部活動等への積極的な参加を通して、自主性・協調性・チャレンジ精神・創造力を育てる。 ② 諸行事の企画や運営を通して集団の一員としての自覚を高め、たくましく生きる力と好ましい人間関係を築くことのできる生徒を育てる。 ③ ボランティア活動などの地域貢献活動に参加することで、自己有用感を持ち地域社会に貢献しようとする態度を育てる。
		計画	① <u>生徒が積極的に学校行事に参加できるよう、生徒会が中心となって生徒と教職員の意見や要望を集約し、行事の内容を一層充実させる。</u> ② <u>限られた時間を有効に活用し、休養日を含めたメリハリのある部活動の取り組みを目指しながら、人間性の向上を図るよう意識づける。</u> ③ <u>ボランティア推進委員会を中心に、各専門学科クラブ、部活動と連携して、生徒の主体性に基づいて、身近に今できる地域貢献活動を推進する。</u>
5	その他 (情報発信及び家庭との連携)	目標	① 本校の様々な教育活動に対して保護者や地域の理解を広げられるように努め、連携して生徒の育成を図る。 ② 情報共有手段の積極的な活用により、適切な情報発信を行うことで、保護者や地域の人々に氷見高校の活動を知ってもらい、生徒の活動の場をさらに創造する。
		計画	① <u>地域と連携した活動への参加を積極的に進める一方、PTA参加行事の内容をより保護者の関心が高いものとなるようアンケートを実施するなど、より多くの方々の学校行事等への参加を目指す。</u> ② <u>ホームページの内容の改善や公式SNS等を活用することで、本校の取り組みの発信力を高め、多くの方に理解いただけるよう工夫を施す。また、「安心・安全メール」によりリアルタイムに情報発信をする。</u>

5 今年度の重点課題（学校アクションプラン）

令和8年度 氷見高等学校アクションプラン - 1 -	
重点項目	学習活動（生徒の主体的な学び）
重点課題	I C T活用と地域協働学習による主体的な学びの深化
現 状	(1) I C T活用の推進 Society 5.0の時代に要請される資質・能力育成のため、I C T環境整備が進捗し、教員へは一人一台のタブレットが貸与され、昨年度より1年生は一人一台タブレットを購入する運びとなった。I C T活用は、生徒の「興味・関心を高める」「課題を明確に捉える」「図や写真による理解促進」「知識の確実な定着」など、多岐にわたるメリットをもたらす。この背景から現代の教育においては、あらゆる場面でのI C Tの効果的な活用が強く求められている。しかしながら、授業におけるI C T活用の現状を見ると、指導用PCからプロジェクタへの画面拡大提示が主流であり、生徒のタブレット活用は一部の授業に限られている。今後の課題として、I C Tを用いた協働的な学習や家庭学習における積極的な活用を一層推進するために、教員側のI C Tスキル向上を図り、I C Tを積極的に取り入れた授業への改善を進めていく必要がある。 (2) 地域協働学習について 総合的な探究の時間「未来講座HIMI学」においては、令和5年度以降、地域人材が学習の伴走者として継続的に関わることで、より実践的な探究活動を展開している。また、令和6年度からは、モデレーションの実践や、普通科における1・2学年を通して一貫したテーマに取り組むことができるカリキュラムを導入した。さらに、生徒が考案した課題解決案の実行に対しては、氷見市役所から資金的援助を受けている。これらの取り組みにより、生徒が課題解決に向けて検証・分析・再検証を繰り返しながら、自らの考えを実際の行動へ移すことのできる環境が整いつつある。昨年度の「未来講座HIMI学」では、生徒が探究のサイクルを一定程度繰り返しながら学習を進めることができた。また、地域協働学習を通して、教科学習へのモチベーションが高まったと回答した生徒の割合は9割を超えている。一方で、発表会等における資料作成やプレゼンテーション能力には、さらなる向上の余地がある。また、地域協働学習で各教科の学びをどのように活用し、逆にどのように得られた学びが各教科に波及しているのかについては、十分に明らかになっていない。したがって、発信力の向上を目指すとともに、各教科で育成された資質・能力が地域協働学習でどのように活用されているのか、その実態及び教科での学びとのつながりを実感できるようにする支援の在り方を明らかにする必要がある。
達成目標	(1) ① I C Tを学習の基盤として日常的に活用し、主体的に学びに向かう姿勢を育成した生徒の割合・・・80% ② I C Tを効果的に活用した授業実践や教材研究を継続的に推進した教員の割合・・・80% (2) ① 地域協働学習を通して、資料作成やプレゼンテーション等の発信力が向上したという生徒の割合・・・80%以上 ② 地域協働学習において、各教科で学んだ内容や見方・考え方を活用できたという生徒の割合・・・80%以上 ③ 教科での学びと地域協働学習とのつながりを実感できたという生徒の割合・・・80%以上
方 策	(1) ・教育クラウドサービスを活用した課題提示と個別最適化されたデジタル副教材の提供を通じて、生徒がI C Tを日常的に使いこなし、授業や家庭学習においても主体的に取り組む習慣を確立する。 ・年2回実施される互研授業週間におけるI C T活用授業の積極的な参観を通して、全教員が一体となって授業改善や教材研究に取り組む。加えて、教員のスキル向上研修を実施し、授業でのI C T活用頻度を向上させる。 ・D X加速化推進事業の活用により、専門学科間の連携を図り、無人販売所の開店に向けた取り組みを行うことで、デジタル活用能力と協働する力を育成する。 (2) ・課題設定段階において物事を教科的視点で捉える活動 生徒の自由な関心や地域課題を出発点としつつ、それらを各教科で身に付けた資質・能力を用いて捉え直し、問いとしての妥当性や精度を吟味する過程を意図的に設ける。 ・毎時間の振り返りフォーム 探究過程において、振り返りを通して総合的な探究の時間と各教科との関係を言語化する機会を設定する。 ・教科との関係を可視化したり共有したりする活動 教師と生徒の対話の中で地域協働学習と各教科の関係を生成し、それを模造紙や付箋を用いて可視化しながら更新していく。 ・プレゼンテーション研修 外部講師を招き、視覚的に伝わるスライド構成や、聞き手の立場に立った話し方や伝え方を学ぶ時間を設定する。

令和８年度 氷見高等学校アクションプラン －２－

重点項目	学校生活（心身ともに健康で充実した高校生活）		
重点課題	「誇りに思える氷見高校」「安心して過ごせる氷見高校」の構築に向け、人権尊重の精神を基盤とした良好な人間関係の構築や、自己実現を図っていくための規範意識・自己指導能力の向上、心身の健康を保持増進する意識の醸成を図る。		
現 状	・さわやかな挨拶を交し合える学校を目指し、さわやかデイを通した「あいさつ運動」を行うことで、日々の学校生活の中でも、自発的に挨拶を行う生徒が多数見られる。しかし、制服の着こなしや、携帯電話の取り扱いに関して、規範意識の低い生徒も散見される。 ・学校生活における不安や悩みに対して常に留意し、いじめ撲滅等「安心して過ごせる氷見高校」の創造を目指している。しかし、利己的な言動により他者を傷つけてしまう事例もある。 ・健康診断結果による治療よりも部活動を優先してしまったり受験時期に治療のタイミングを逃してしまったりするなど、健康管理が疎かになる傾向がある。そのため、自立的な健康管理の意識付けを行う必要があり、特に、歯科検診では、本人が不調を感じていない場合に受診せずに済ませてしまい、治療率が向上しない現状がある。		
達成目標	① 生徒主体の取り組みによる挨拶・服装・携帯電話の取り扱い等の規範意識の向上	② 学校生活に関する悩みの解消を通して、「安心して過ごせる氷見高校」に関する意識の向上	③ 様々な健康課題、自然災害の危険性を発見、解決し、健康で安心安全な生活の実現をしようとする意識向上
	生徒意識調査における規範意識率 95%以上	生徒意識調査における学校生活を安心して送れたと感じる生徒の割合 98%以上	生徒意識調査による「健康課題の解決」と「自然災害の危険性発見と対策」に対する意識向上率 60%以上
方 策	① 本校独自の取り組みである年7回の「氷高さわやかデイ」の取り組みにおいて、挨拶の意義を事前指導し、その価値を意識しながら実施する。また、「誇りに思える氷見高校」をキーワードに、生徒会を中心とした生徒が主体となり、学校社会はどうあるべきかという視点で、学校生活における約束事について啓蒙・啓発の輪を広げ、その過程において全校生徒が自己指導能力を高め、自己有用感を感じられる学校生活を送ることができるようにする。それにより生徒自身が氷見高校生であることに矜持を抱き、「誇りに思える氷見高校」を創造し、社会的マナー意識の向上も図る。 ② いじめ撲滅等「安心して過ごせる氷見高校」をキーワードに、より良い学校生活を過ごすことができるように、人権教育を基本とした視点から、生徒と教職員が一体となり良好な関係の構築に向けて働きかける。ホームルームや集会等で、「生命・人権の尊重」を訴えるとともに、学期ごとに「被害調査」によるアンケートを実施する。また、日々の生徒観察で人間関係に関する悩みや問題行動を早期に把握・察知し、得た情報をもとに、迅速かつ周到に対応する。また、「いじめ対策委員会」の体制を構築し、実働する。 ③ 生徒保健委員会を通じて、生徒の「健康課題」を探り、食事等、個別の「健康課題」の解決に向けて、生徒が主体的に考えるような取り組みを工夫する。また、生徒保健委員会の活動とPTA保健体育委員会の活動が連携できるよう工夫を施す。生徒や保護者への情報発信を通じて、「健康課題」「自然災害対策」を解決する取り組みを促していく。		

令和8年度 氷見高等学校アクションプラン - 3 -

重点項目	進路支援（生徒の進路実現に向けた進路指導）	
重点課題	個々の生徒に応じた進路指導の取り組み	
現 状	・5学科を有する高校のため、多様な学力や価値観を持つ生徒が混在している。個々の生徒の適性と希望に応じた進路を実現するためには、生徒に自分自身を理解させた上、各自に合った進路学習を主体的に進める態度と方策を身につけさせる必要がある。 ・職業や上級学校についての理解や、入学試験・就職試験などに対する基本的な知識量が不足している。キャリア学習を通じた進路選択の機会、Web・対面オープンキャンパスの参加等を促進し、情報獲得の機会を増やしたい。 ・1～2学年の全体的な進路学習の機会は限られている。生徒自身が進路について継続的に考え、将来や職業について周囲と意見を交わすことのできる雰囲気を醸成する必要がある。高い志を持って進路実現に挑戦する生徒を育成する体制強化が重要であり、他部署と連携した横断的な指導、面接やホームルームの活用が求められる。 ・3学年は9月の就職試験から3月の国公立大学後期日程まで7か月にわたる多様な受験を指導・サポートする。5学科の特性と個々の生徒が培ってきた経験と学力が進路選択と受験に価値あるものとなるよう、学年、教科、各部署との連携を密にする必要がある。 ・面談技術や受験情報の収集・提示方法、保護者との連携など、進路指導のノウハウを蓄積・向上させる体制の充実を図る必要がある。	
達成目標	① 進路意識の高揚および主体的に進路実現に挑戦する生徒の育成	② 進路関連行事や進路に関する情報提供、個人面接等の充実
	・社会につながる実践的な学びを通して、自らの進路決定に向かう意欲が向上したと感じる生徒の割合 80%以上 ・オープンキャンパス等への参加 1学年＝30%以上、2学年＝50%以上 3学年＝75%以上 ・ICT機器を活用し自発的に進路学習を進めようとした生徒の割合 80%以上	・進路統一ホームルームや大学等見学の満足度 70%以上 ・個人面接等の満足度 80%以上
	③ 進路希望の実現 （第3学年 進学希望者）	④ 進路希望の実現 （第3学年 就職希望者）
	・出願校決定に向けての満足度 80%	・就職希望者の就職内定率 100%
方 策	・社会の一員としての自己を意識させる。他者と協働し多様な価値に触れる中で、自己選択、自己決定し、進路実現に向かうよう環境を整える。 ・キャリア学習と進路実現の手立てを知る機会を設けるなど、各学年に応じた計画的な進路指導を行う。自らが目指す姿を描き、早期に自己の適性の理解及び将来設計を具体化させ、意欲的に学習ができるように指導する。 ・生徒がそれぞれの進路目標や学力に応じて、学習の計画や進路学習に取り組めるよう、学習支援ソフトやワークシートを活用し、成果を学年で共有する。 ・進路に関するホームルームを実施し、より効果的な系統指導プログラムを作成して、学校全体での計画的な指導体制の共有化を図る。（進路統一ホームルームを年3回程度実施） ・各学年と連携し、3年間を見通した進路指導を行う。 1年次「進路ガイダンス」「学問・職業の研究」「文理選択」「企業評価バトル」「卒業生と語る会」他 2年次「大学等見学」「修学旅行（班別研修）」「学部学科の研究」「企業評価バトル」「オープンキャンパス」「インターンシップ」「卒業生と語る会」他 3年次「進路ガイダンス」「オープンキャンパス」「就職説明会」「企業見学」「進学検討会」他 ・個々の生徒の実態と進路に関する情報を教員間で共有する。 ・生徒や保護者向けの進路説明会を実施し、情報提供に努める。	

令和8年度 氷見高等学校アクションプラン - 4 -

重点項目	特別活動		
重点課題	学校行事・部活動・各主体による地域連携活動のさらなる活性化		
現 状	・学校行事は、全校生徒の参加意識や達成感、協働して生きる力をより高めていくために、生徒の意見を取り入れながら、生徒会執行部を中心に企画・運営を連携して実施する。 ・部活動は、全校生徒の約90%が加入しており、生徒の協調性やチャレンジ精神、創造力の向上に大いに寄与している。限られた時間を有効活用するために、明確な活動計画と工夫した時間活用が求められる。また、生徒数減の影響による部費の予算確保の検討が必要である。 ・積極的にボランティア活動などの社会貢献活動に参加しようとする生徒が毎年4割程度いる。地域と連携した美化活動の計画やボランティア推進委員会を中心に家庭クラブやJRC部等とも連携し、地域社会に貢献する活動に参加する生徒をさらに増やしていきたい。		
達成目標	① 各学校行事の内容の充実	② 部活動に参加することで協調性やチャレンジ精神、創造力を高める生徒の増加	③ 地域の社会貢献活動に参加することで地域の課題を当事者意識としてとらえ、地域社会に貢献しようとする態度を養う
	各行事に対する生徒の満足度 90%以上	3学年生徒の満足度 90%以上	美化活動、環境保全活動、募金活動等の地域の社会貢献活動への全校生徒の意欲的参加
方 策	① 各行事の前に各種委員会の開催や事前アンケートを行い、全校生徒の参加意識を高め、生徒が主体的に協働して活動を進められるようにする。また、生徒数減の影響を考慮しながら、内容の見直しやより生徒の達成感が高まるよう工夫する。 ② 部活動を通して、協調性やチャレンジ精神、創造力の向上を図ることの大切さを全校生徒に意識させつつ、目標を明確にし、計画的にメリハリのある取り組みを促す。各部の部費予算を確保し、安心・安全な活動を継続できるようにサポートする。 ③ ボランティア推進委員会を中心に、ボランティア活動などの地域で行われている社会貢献活動のチラシ配布や放送などを通して、全校生徒に積極的な参加を呼びかけるとともに、活動後の記録や感想を残すなど、振り返りの機会を設けることで、地域社会が抱える課題への関心を高め、地域社会に貢献しようとする態度を養う。		

令和8年度 氷見高等学校アクションプラン - 5 -

重点項目	その他（情報発信及び家庭との連携）	
重点課題	適切な情報発信及び保護者との情報共有の推進	
現 状	・家庭との連携を図るために、PTA活動への積極的な参加を呼びかけている。 ・PTA定期総会の実施…昨年、総会への参加保護者数は、27.2%（1年26.8%、2年22.7%、3年35.2%）とコロナ感染症が減少に移行しても低い水準にとどまっている現状である。学年別PTA研修会においても、3年普通科90.3%、3年専門学科29.8%、2年33.1%、1年55.7%と、年によって変動があるものの低い傾向にある。また、研修会内容についての保護者からの意見集約が十分にできていない。 ・PTA会報「ゆづるは」の発行…広報委員により年2回の発行を継続している。体育大会や氷高祭などの学校行事、授業の様子や部活動などの様子を、紙面を通じて発信している。 ・学校と保護者との情報共有手段として、「氷高安心安全メール」への登録を保護者に呼びかけており、登録率は高い水準（令和7年度98.3%）で安定している。 ・学校の広報活動としてホームページを活用している。学校の紹介や行事等を随時掲載しているが、更新の遅れや内容に不十分な箇所があり見直す必要がある。また、SNSアカウントの活用についても検討の余地がある。	
達成目標	① 学年PTA研修会への参加を促す企画の立案、実現。各行事の情報の発信。満足度の向上。	② 「開かれた学校」の実現と、SNSの発信力の強化
	・学年PTA研修会での事前事後アンケートの実施 ・学年PTA研修会保護者満足度 80%以上	・各分掌や学科ごとにSNS担当者を設けることで、現場の情報を直接吸い上げられる体制を整える。これにより、学校生活の多様な魅力を高い頻度で全国へ発信する。 ・行事等の活動をリアルタイムに発信することを徹底し、情報の鮮度を重視した運用を行う。
方 策	・定期総会の講演内容に関して、保護者アンケートをGoogleフォームで調査し、保護者の希望に沿った内容の講演を実施することでPTA活動に関心を持ってもらう。 ・学年PTA研修会の前後にGoogleフォームで保護者アンケートを実施し、集まった意見を活かして研修会内容の改善を図る。	・従来の紙による起案や決裁ルートを縮小し、Googleチャット等を活用して内容を即座に確認・承認できる仕組みを導入する。管理職・担当者間のやり取りをデジタル化することで、現場の判断でスピーディーに投稿できる環境を整える。 ・各担当者が現場の様子をスマホで撮影し、専用のチャットへ共有するだけの素材共有を基本とする。編集の手間を最小限に抑え、担当者が順次アップしていくことで、投稿頻度を上げ、学校の「今の姿」を逃さず発信することを目指す。